

大槻玄沢と「西賔対晤」

山形 敏一

まえがき

〔1〕「新撰洋学年表」(昭2)によれば、大槻玄沢の「西賔対晤」⁽²⁾は寛政六年(一七九四)の項に出ているが、その全貌は日蘭学会の刊行した「西賔対晤」(昭53)によって明らかにされた。

しかるに、大槻玄沢自筆の「丙戌春来朝会話雑記」という小冊子を検討してみると、玄沢自身が「西賔対晤」^{自寛政甲寅至文化甲戌}と記した冊子以外にも、文政元年(一八一八)、文政五年並に文政九年の客館対話の手記があったように思われるのである。

「新撰洋学年表」と「西賔対晤」

「新撰洋学年表」の寛政六年の項に、「四月和蘭甲必丹ゲイスベルトヘムミイ(四二) 江戸参府五年目例参 五月桂川栗本第一回也 江医官及石川(註玄常) 大槻宇田川森島諸氏蘭人客館本石町三丁目長崎屋源右エ門 参集して疑義質問外科医ハルトケルレン(三二) ○此日杉田前野不参」と記され、次のような註記があり、待医桂川甫周(一七五一—一八〇九)の推進によって表現した。

「客館にも濫に出入を許さざる制となりしが桂川甫周は左の申請書を少老の許に差出 寅四月二十四日

大槻玄沢 宇田川玄随 森島中良 杉田玄白 前野良沢

右者私蛮書同学の者に御坐候 何れも蛮書の内積疑も御坐候間紅毛人に直に質問候はは後來考合相成候義も多有御坐と

奉存候 不苦義に御坐候はば私対談の御右之者共一兩人宛同道仕度奉存候 依之御内意奉伺候 以上

若年寄より阿蘭陀人对談之義銘々主人より長崎奉行へ申達べしとありて公許となる」

なお、最後に記された次の文章は「西賈対晤」成立の事情を明らかにしたものである。

「我家に西賈対晤」と題する冊子あり 此年より二十一年間甲必丹例參六回毎次の対話記録なり 磐水其首に記して曰く此一挙余年来此道ニ篤キノ餘リ桂公ノ深志ニ出ルト雖モ陪臣ノ身トシテ恭シク敵命ヲ奉シ殊方ノ異客ニ応接ヲ許サレ素業ノ疑問ニ及ビシコト其益不益ハ姑ク論ゼズ我道ノ面目ニシテ本懐ノ至リ感戴スルニ勝ヘザルコトナリ 因テ其顛末ヲ記シテ後昆ニ伝フ」

次いで寛政十年の項には、「三月和蘭甲必丹例參桂川大槻杉田諸氏客館対談如例」と記し、註記に、「医家初学の仕方如何 解剖より習始む 図五の下に一二三の数字は如何 三十一数也など数語の問答あり」と記している。

また享和二年（一八〇二）二月の項には、「和蘭甲必丹例參桂川大槻宇田川諸氏客館対話」と記し、註記に、「外科医レツク質問は鉛糖水其他数条なり桂川は内命を帯び顕微鏡の事を問ひ巨細上申せしと云ふ」と記している。

文化三年（一八〇六）の項には、「三月和蘭甲必丹道富江戸例參」と記し、註記に、「西賈対晤に牛乳白癩などの質問に対し辞書医書を見せらるとあるのみ 他の対話を記せず」記している。

文化七年の項には、「和蘭甲必丹ドーフ江戸例參大槻父子文沢 杉田兄弟白元 立卿其客館に詣り学校教導法其他数件問答」と記し、註記に、「ドーフは寛政末より長崎に在留して十余年頗日本語に通せり 此年例參の途次京都に入り祇園二軒茶屋に憩ひし時に店婢の豆腐切を見て俳句あり 稲妻の其手かりたし草枕」と記している。

文化十一年の項には、「二月和蘭甲必丹江戸例參大槻宇田川諸氏依例対話」と記し、註記に、「高橋作左エ門より甲必丹參府に先だち天文方属員馬場大槻宇田川諸人は佐十郎通弁にて不審の件々自由対談致度と上請せし所可為願之通但立合通詞無之義難相成と令す此回対談は著色解剖図懐中時計等」と記している。

なお、後記には次のような重要事項を記している。

「西貢対晤 寛政甲寅より文化まで六回の対談にて爾後書継なし 想ふに最早蘭人との質問に用なきに到りしならん 其故は文化中年より斯学いたく開け横文も自在に読破され西洋の事物研究は書上に於て十分となりしなり 甲必丹は商船長にて附随の医員は療治一通り心得居る者なり 此方の蘭学者より学力等遙かに低きは云ふまでも無けん 但し後三回目（文政丙戌）来航の医員は例のシイボルトにて此人より洋学全く開く」

しかし、文政元年（一八一八）の項には、「四月和蘭甲必丹江戸例参 杉田立卿に贈る」と記され、次いで文政五年（一八二〇）の項には、「三月和蘭甲必丹江戸例参桂川大槻宇田川諸氏客館対話」と記され、また、文政九年の項には、「四月和蘭甲必丹江戸例参医員シイボルト随従」と記され、次のような註記がある。

「シイボルト医名高ければ其滞在の際に客館に出入して質疑を試むる医師学者極て多し 甲必丹スチュレルは和蘭軍人にて一世拿勃命の乱に戦功ありし人なり 天文方高橋作左エ門就て其談話を筆記し丙戌記聞と云ふ 猶又シイボルトが拿勃命一代記を所持すと聞き懇望せしもシイボルト肯はず 再三再四に及び日本実測地図とならば交易せんと告ぐ 高橋は乗かかりし事として其需に応じたりとぞ 又奥医師土生玄碩も懇請して其秘法とする眼療の伝授を受け酬ゆるに葵の紋付羽織を贈与したり 日本図と交易せし原書は拿勃命一代記なる事これ吾家の所伝なり其書名を記したる者を見ず」

なお、大槻修二撰の「日本洋学年表」は明治十年（一八七七）東京上野に開かれた第一内国勸業博覧会に出陳され、大正十年三月跋文を書いた「新撰洋学年表」は昭和二年一月に出版されている。

「西貢対晤」と「官途要録」

「西貢対晤」は寛政六年（一七九四）から文化十一年（一八一四）まで六回に亙り、江戸参府の和蘭甲必丹一行を訪ねて質疑を行った玄沢の手記で、大槻家より静嘉堂文庫の蔵書となっているものを昭和五十三年三月日蘭学会が出版し、大鳥

蘭三郎氏の解説が付けられている。

第一回の「甲寅来貢西客対話」は二十五葉の冊子で、寛政六年五月四、五日の質疑の覚書を同年五月十五日に清書したものである。

まず、冒頭に、この対話の成立した経緯が記されている。すなわち、東都来貢の阿蘭陀人加比丹の例年参府にはシキリイバ(書記)とオップルメイストル(医師)が随従し、従来は官医だけが対談して質問することになっていたが、桂川甫周の申請により同様の陪臣の医員も参会することを許された第一回の対話であった。五月四日午後三時から日本橋本石町三丁目の長崎屋源右エ門の二階坐舖に官医側から栗本瑞見、桂川甫周、桂川甫謙、渋江長伯、随行者として森嶋甫斉(通称中良)、宇田川玄随(津山藩医員)、大槻玄沢(仙台藩医員)が加わり、長崎奉行の検使、下検使が列席し、通詞今村金兵エが通弁した。加比丹は四十二歳の Gjsbert Hemmij (一七四七—一九八)、書記は Leopold Willem Ras (二十七歳)、医師は Ambrosius Lodewijk Bernhard Keller (叔尔列爾三十二歳)で、玄沢は主としてドイツ人医師ケルレルを話相手とした。まづ「ヘイステル」外科書の疑問名をただし、医師持参の「バックス」繙帯書、Plenok 眼科書を「渴望ニタヘス」と記している。五日午後三時過ぎから始まった医家の対談には、栗本、佐藤、桂川、石川玄徳のほか玄沢ら三人が加わり、大通事加福安次郎が通弁した。玄沢は刺絡の適応症の診候について質問したが要領を得ず、新生児の臍帯脱痕難治症の療法について質問し、「チンキチュールメラ」の処方聞き出している。次いで脈候についてたしたが、診脈法だけを聞いて、「其脈ヲ診スノ心得等其詳審ナルコトハ聞ニ及ス亦復遺恨ナリ」と述べている。さらに、種痘について問答し、ケルレルは、わが国で行っている支那所用の種痘法は無効であり、極軽症の順痘の膿水を接種する接痘が有効であるとし、甫周に痘瘡書一冊を贈った。その後医師の部屋で薬籠を見せて貰い、さらに、書記のラスにオランダの格言を書いて貰い、読法と大意を記したのち、石川玄徳が彼国の医家の名哲を問うたところ、Hippocrates, Galenus, Eristratius の名を記し、「此等往昔ノ明医ナリ」と答えている。

第二回の「戊午来貢蘭客通弁」は二十八葉の冊子で、寛政十年三月二十五日の質疑の覚書を同年四月一日に清書したものである。この時の加比丹と書記は前回と同様であるが、ヘムミイは翻胃（註 慢性嘔吐）で病臥中のため、書記のラスとドイツ人医師の Herman Retzke（二十九歳）と対談した。三月二十五日午後長崎屋奥二階西廣旅寓の坐舖に集ったのは、桂川甫周・甫謙、土岐寛庵、堀本好益、松延玄之（水戸）、鈴木裕甫（水戸）、大槻玄沢（仙倉）、杉田伯元（小浜）の八人で、小通詞本木庄左エ門が通弁した。玄沢とレッツケの問答ではレッツケはしばしば答え得ずして、「学オノ程知ルベシ」とか、「浅学知ルベシ」と評しているが、「医家初学入門ノ仕方如何」という問には、「アナトミア解剖科ヨリ習ヒ初ルナリ」とか、「先初ニ名医ノ講解ヲキキ論談弁議シ其事ヲ曉リテ後為ス事ナリ」とか、「頭部ヨリ解キ始メ胸腹四肢ニイタル」と答えているのは、当時のドイツ医学校の解剖科の課程を示しており、携帯の医書として、「Themens onderrijfs トイフ内外科ヲ説タル小冊ト」「ゴルテル」ノ小巻コレ内科撰要ノ原書ナリトヲ出シ示ス」とあるのも旅行中として当然だったかも知れない。次いで書記のラスに「スプレーキウォールド（警論法言、格言）」二葉を書いて貰ったのち、玄沢はラスと「蕪録」に詳説した異形の煙管 Hog（福蛤）^{ホッパ}について問答し、薬品のうち広東人參についてレッツケは、「北亜墨加洲ニ属セル York（エキオルク）ト云フ地ヨリ求メ来ル多ク払即察（フランス）及ヒ諸厄利亞（インゲリア）国人彼地ヨリ貿易シ来リ広東ニ輪シテ交易ヲナスナリ 乃チ Amerikaansche Zom（アメリカンセンソム）ト書スルナリ」と答えている。医療だけに止まらず、玄沢の物産学に対する知識欲の旺盛なこと知るべきである。末尾に「附録通事雑話」四葉、「西洋参」（異名広東人參）三葉を加えていることもそのあらわれである。

第三回の「壬戌来貢三回対談」は二十二葉の冊子で、享和二年（一八〇二）三月四日午後一時—三時、次いで七日午後三時から長崎屋で行われた対談の記録である。参加者は吉田快庵、杉浦玄徳、桂川甫周・甫謙、松延玄之（水戸）、宇田川玄真（津山）、岡田甫説（浜田）、知神甫仙（佐伯）、大槻玄沢（仙倉）の十人で、通弁は横山勝之丞である。加比丹は四十一歳の Willen Wardenaar、書記は二十二歳の Maarto Mak、医師は三十二歳の Hermannus Retzke だ。寛政十年に引きつ

づき参府している。玄沢がブレンキ眼科書中の「ロートワーターハンコウラルド」という薬方の配合方法を質問したのに対して、ドイツの医師コウラルド新製の方でロートソイケル水であると答え、滞留中に其製方を蘭文で記して玄沢に贈っている。署名には、「一千八百二年アププリル七日玄沢君ニ呈ス 君ノ親シミヲ蒙ル友人ヘルナージュス レツツケ」と記しており、流石に四年前、玄沢から「浅学知ルベシ」と罵倒された佛はみられない。そのほかに、ブレンキ眼科書のアップルパップ（糊劑）の製法や骨折傷の縛法やクールダランキ（清涼飲）、フロートワーター、ワーターダランケン等の名義や製法を問いただし、さらに携帯の医書を見せて貰って筆録している。

七日午後三時からの対談には桂川甫周、大槻玄沢、岡田甫説、知神甫仙の四人が参加した。玄沢はシュールデークなどの製法を質問したのち書記マックに託したスプレーキウォールド（格言）四葉を写している。なお、四日に加比丹の示した一七七六年（安永⁵）版カテスベキ（M. CATESBY）の鳥獣譜を堅田侯堀田正敦（伊達宗村六男、堀田正富の嗣となる、一七五五—一八三二）より長崎奉行肥田某をして請借し、八日に玄沢に閲覽させたが、玄沢は第三巻の末の人参図説を読み、「アメリカンソム」（西洋人参、広東人参）を訳文し、「コレ当春対話ノ一益ニシテ始テ広参ノ冤ヲ雪キ其性功ヲ詳ニシテ世ノ惑ヲ解コトニナリス」と記しているが、玄沢の知識欲と真理探求心の旺盛なことを知ることができる。

第四回の「文化丙寅蘭人对談記」は僅か四葉の冊子で、文化三年（一八〇六）三月二十一日午前十一時から两国紅毛人旅宿河内屋米次郎宅で行われた対談の記録である。これは長崎屋が類焼したためで、また桂川甫周はすでに対談を終えていたので、大槻玄沢と玄幹の二人だけで、小通詞今村才右エ門が通弁をした。カビタンは三十歳の Hendrick Doeff（一七七七—一八三五）、書記は二十三歳の Dijk Goezman、外科医師は二十歳の Johannes Feilke である。この時は一七六七年（明和4）版の No.1 のウォールデンブック三冊、Har 内科書、一七六六年（明和3）版の薬局書を記載し、カルネメルクを質問し、さらに寛政十年三月の第二回対談のとき、加比丹ヘムミイ並に医師ケルレルより聞いたキンドルポッケンが十年前より亜細亜洲にも伝播して来ているので、起原の所を質問したが、「此答未詳」と記されている。江戸参府の医官よ

り新刻の所蔵医書を提示して貰うのが玄沢の対談の通例のようである。

第五回の「庚午西貢対話記」は二十三葉の冊子で、文化七年（一八一〇）二月二十九日夜大槻玄沢は加比丹ドーフ、医師ヘルケと対話し、次いで三月十七日午後二時から大槻玄沢・玄幹、杉田伯元・立卿らが参加し、馬場佐十郎が通弁したが、このときはヘルケ病気のため、前回も参府した甲比丹ドーフと書記ホウセマンとの対談であった。

二月二十九日夜は馬場佐十郎の通弁で、甲比丹部屋でドーフ、ホウセマン、ヘルケの三人酒宴の処へ至り、同坐献酬して質疑を交わしたが、ヘルケ蔵書としては一七六五年（明和²）版の薬剤書、一七九八年（寛政¹⁰）版のヘーステル外科書（ゲースケル蘭訳）、一七八〇年（安永⁹）版のズウィーテン内科書（ファン・デン・ハール蘭訳）、一七六二年（宝暦¹²）版のゴルテル外科書を記し、Professor については、「医学館ノ都講トモイフヘキ官也」と記し、「オ、ストインジーンハ亜細亞諸国、ウエストインジーンハ亜墨利加諸国ライフ インジーンノ義未考トドーフイヘリ 印弟^{インジニア}亜ヨリ来レルカ」と述べているのは玄沢の学識がドーフに優っていることを示している。また、「アムステルダムニハ免許ノ娼家アリ 有妻ノモノハ遊行セス モシ私ニ行キテ露ルレハ其家妻ノモノトナリ丈夫ハ放逐セラレ家財ヲ半々分チテ与へ出ストナリ 尤士大夫ハ至ルコトナシ 軽キモノ多クハ他方ヨリ来ルモノ遊行スルナリ 一廓ヲ構フルニアラス 一町内ニアリ十五六軒モアルヘシ 私^{コソツヤ}窠子ニ至リテハ千ヲ以テ数フヘシト」と記し、飾り窓の女の渊源の古きことを示唆している。なお、「内科ハ外科ヲセス外科ハ内科ヲスルコト法度ナリ 志アルモノハ学ヒハスルコトナリ 然レトモ療治スルコトハナラヌ法ナリ」と専門医制度のあることを付記している。

三月十七日午後二時よりの対談は医師ヘルケ病気のため、馬場佐十郎を通弁として甲比丹ドーフと質疑を行った。「其国学校教導ノ法ハ如何ナル事ニヤ」という問に、ドーフの答は、「アムステルダムニ大小学校有り 師範役一人外ニ助教一人人有リ 書学算術言語学等ナリ 十三歳以下ノ児童ナリ」、また、「病院ガストホイスハイカナルモノニヤ」との問に対しては、「アムステルダム数ケ所有リ 医師本役助役相詰ル乞来ル病客ヲ療治イタシ遣スナリ 常ニ二三百人モ有リ

皆施薬ヒシテ官建置所ノモノ也」さらに、「國中ノ病者ハ必ス其所ヘ行キテ治療ヲ乞フ事ナリヤ」との間に對しては、「病院へ請ヒ来ルモノハ皆貧民ナリ 手廻リ出来ル者ハ銘々時ノ上巧ヘ自分ニ託シテ治ヲ受ルナリ」との答を得て、「答ノ如キ程ノ事ハ聞ニモ及ザル事也」と述べている。なお、格言六葉のうち最初の二葉にだけ訳文を併記している。

第六回の「甲戌春對話記」は十八葉の冊子で、文化十一年（一八一四）三月高橋作左エ門（景保、一七八五—一八二九）が文化五年死亡の桂川甫周に代つて世話役となり、大槻玄沢と宇田川玄真の二人が馬場佐十郎の通弁で甲比丹ドーフと對話をした。最初に、医師の携帯医書として、一八〇四年（文化一）版の Pleack 解剖書、一八〇〇年（寛政12）版の Pleack 治療書、一七七一年（明和8）版の Schutte 産科書、一七六九年（明和6）版の英国版著色解剖書大本三冊（精密最上ノ書ナリ）と後記している）、一七五六年（宝曆6）版の Verney 治療書を挙げ、ブレンク解剖書の一節を写し取り、さらに粘液囊の記載を写しとっている。

最後に、覺として記した玄沢よりドーフへの贈物は、錫器入茶一箱、蛇目傘一本、兎皮（仙台産）、八丈島一反、鼻紙入（丈吉殿）、暑中不断着単物地（フロウ、江）である。ドーフは引田屋遊女瓜生野との間に丈吉をもうけているが、玄沢は丈吉と瓜生野にも贈物をしていることがわかる。

「官途要録」は大槻家より早稲田文庫の蔵書となったもので、文化十年（一八一三）二月十日より文政十一年（一八二八）五月二十五日までの大槻玄沢・玄幹の仙台藩関係の御用留で二二二葉の小冊子であり、最後に天保十二年（一八四一）十二月大槻平次の追記した五葉が付け加えられている。

「西賔対晤」は幕府の許可を得て実施された公式記録であるためか、玄沢の仙台藩に対する御用留である「官途要録」のなかには記録されていない。したがって、玄沢が、「西賔対晤自寛政甲寅至文化甲戌 校合可致事」と手書した以後の公式記録は

確認されない。尤も「新撰洋学年表」⁽¹⁾では文化甲戌（一八一四）以後も、文政元年（一八一八）四月、文政五年三月、文政九年四月に、それぞれ和蘭甲必丹江戸例参と記され、また、「文政十年（一八二七）三月晦大槻玄沢死子玄幹承家亦襲称玄沢」

と記されているから、玄沢は「西貢対晤」⁽²⁾をまとめたのちも三回に互って江戸例参の和蘭甲必丹らと対談していたと思われる。

「江戸参府紀行」と玄沢

文政七年(一八二四)三月十三日付佐々木中沢宛大槻玄沢書翰によれば、文政六年八月和蘭医官として長崎出島に二十歳で着任したドイツ人医師 Philipp Franz von Siebold (一七九六—一八六六)の名声が江戸まで鳴り響いていた。したがって、文政九年四月和蘭甲必丹江戸例参に随従したシーボルトと対談を希望する医師学者が極めて多かったという「新撰洋学年表」の記事は当然と思われる。これを証拠立てているのはシーボルト自身が NIPPON (日本)のなかに記した⁽⁴⁾「一八二六年の江戸参府紀行」である。すなわち、江戸参府紀行日程によれば、シーボルトの行動は次の通りである。「文政九年一月九日長崎出島出発、三月四日川崎より江戸に入る。品川で桂川甫賢、宇田川榕庵らの出迎を受け、午後二時日本橋本石町三丁目の長崎屋源右エ門の宿舎に到着した。三月五日桂川甫賢、神谷源内(中津)、大槻玄沢は面会を求めたが許されず、名刺を置いて帰った。三月七日桂川甫賢と宇田川榕庵より乾腊植物を貰う。三月八日午後多数の日本人来訪、中に薩摩侯島津重豪の名代、数人の高貴な患者がいた。三月十日最上徳内が訪れて蝦夷の海と樺太島の略図を貸してくれた。三月十一日夜のひとつときを桂川甫賢と大槻玄沢とともに過ごす。「両名はオランダ人の友でありヨーロッパの学問の偉大な知己である」と記している。三月十二日高橋作左エ門来訪。「彼も同様にヨーロッパの学問のすぐれた庇護者である」と記している。三月十四日眼の解剖および最も一般的に行われている眼の手術について講義した。幕府の侍医たちは喝采しながらこれに立ち会った。私はこの医師たちが贈物として我にくれた豚を使って手術した。三月十五日幕府の針医者石坂宗哲とその他の医師・知人ら来訪。三月十七日幕府の医師たちは一日じゅう私のところで時を過ごす。私は今日子供の天然痘と種痘について説明するようにせがまれたので(中略)、將軍の命令があれば牛痘漿をバタヴィアから取り

寄せて、日本で種痘を手ほどきすることに同意した。三月十八日夜幕府天文方・友人および知人の来訪しきり。三月十九日將軍の侍医、とくに眼科医（註 土生玄碩）の訪問をうける。私は眼科についての書物と、眼科関係の機械をいっしょに見せる。瞳孔をベラドンナによってひろげる若干の実験を行なう。そのいちじるしい効能に大喝采を博す。薩摩侯の側室が私の診察を求められる。三月二十日幕府の医師たちから盛んな喝采をうけながら、私は今日ひとりの新生児の兔唇を手術し、三人の子供に種痘を行なった。しかし種痘の方は薬が古いので、ただ種痘のやり方をみせるだけが目的であった。三月二十一日再びふたりの子供に種痘をする。三月二十四日医師たちは一日を再び私のところで過ごす。三月二十七日われわれは將軍の侍医・諸侯の家臣らの訪問をうけた。彼らの妻や娘たちも妨げられずにはいることを許され、いつも可愛らしい手作りの、小さい贈物などを持ってきてくれた。三月二十九日天文方および將軍の侍医たちは二、三の学問上の質疑をするために公式に使節のもとに出願する。なぜならば、これまで彼らは職務上の命令で来たものではなかったからである。三月三十日將軍及び諸侯の侍医たち来訪。四月一日高橋作左エ門が蝦夷・樺太のすばらしい地図を私に見せた。樺太とアムール河の河口の間は間宮の瀬戸（Manijanseto）という。四月二日幕府の侍医多数来訪。四月三日―八日友人・知人の来訪しきり。四月九日侍医方に敬意を表して別れの宴を開く。高橋作左エ門が来て、私に日本の美しい地図をみせ、これを世話することを約し、後日またその約束を果たした。四月十二日江戸出発は正九時であった。」

すなわち、玄沢の名が「江戸参府紀行」に記されているのは、三月五日、三月十一日の二回で、面会は三月十一日だけである。文政九年（一八二六）当時三十一歳のシーボルト（一七九六―一八六六）に対して大槻玄沢（一七五七―一八二七）は七十歳、桂川甫賢（一七九七―一八四四）は三十二歳であるから、「兩名はオランダ人の友でありヨーロッパの学問の偉大な知己である」とシーボルトが賞讃したのは当然であつたらう。

丙戌春西貢来朝会話雜記

私の所蔵する「丙戌春西貢来朝会話雜記」は僅か八葉で、しかも九葉の紙片が貼りつけられていることは、「西貢対晤」にまとめる前の原型を思わしめる。このことは、「西貢対晤」⁽²⁾として一冊にまとめた文化十一年(一八一四)三月の江戸参府以後も、文政元年(一八一八)四月、文政五年三月、文政九年四月の江戸参府の度毎に本書のような雑記をつくっていたと思われるが、大槻如電が「日本洋学年表」をまとめた明治十年(一八七七)以前に大槻家から散佚していた可能性を示唆する。

本書巻末の紙片にビュルゲル書として(写真1)、加比丹 Stuller (Joan Willem de Surler 生没年不詳、当時陸軍大佐で、前任者 J. Cock Blomhoff のあとをうけて出島のオランダ商館長となる)、書記 Bürger (Heinrich Bürger 一八〇六一五八、ユダヤ系ドイツ人でオランダに帰化、二等薬劑官でシーボルトの助手として来日、シーボルト帰国後出島の医師となる)、外科 Cichold (Philipp Franz von Siebold 一七九六一一八六六)の名が記されている。したがって、本書は文政九年(一八二六)三月四日江戸に到着したスチルレルの江戸参府の時の会話雜記である。

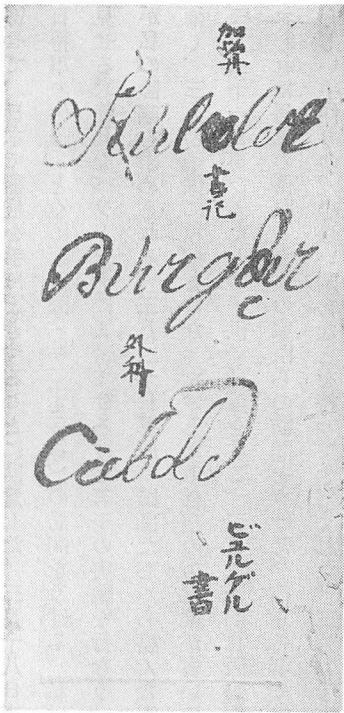


写真 1 文政九年参府和蘭使節
(ビュルゲル書)

第一頁に「土岐鉢十郎殿膝癩病シイボルト処方」と記し、外用と内服方を述べたのちに、「服後吐瀉数行大ニ疲勞セリ(後略)」と記し、「四月五日ヨリ土鉢 大黃 三分三厘強 サルアルモニアカ一匁 右合為末分四貼 次

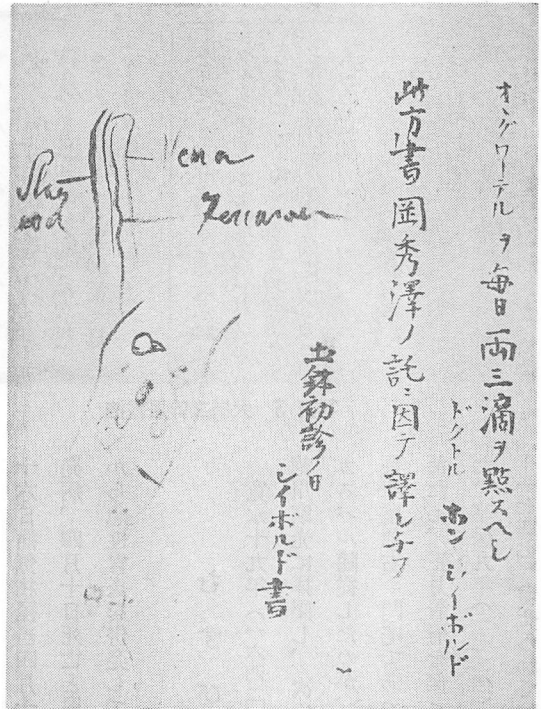


写真 2 シーボルト初診図

蜀葵四錢 煎湯送下 吐後此方ヲ授ク」と記しているから、土岐鉢十郎の膝膕病を診療したのは、「知友多数来訪」と記された四月三日のことでもあろうか。膝膕⁵⁾病とは膝遊風または鶴節風と呼ばれた漿液性または化膿性関節炎だったと思われる。なお、六葉目には初診時にシーボルトの書いた関節の局所所見図を貼りつけてあり、シーボルトの教導が懇切だったことを示している(写真2)。

次に、松木源之丞の旧年寧囊下会陰結毒(註梅毒)のメリクリリスサルフスの貼布療法が四葉目にあり、その上に貼りつけた紙片の処方はカロメル、龍腦、沙糖の内服である。

五葉目に貼りつけた紙片は平次郎眼病処方で、カロメル、大黃、沙糖の貼布をすすめ、それにつづいてシーボルトの「眼病人投剤」の点眼薬の処方を出している。平次郎は玄沢の二男碧溪(一八〇一—一七八)の通称で、当時二十六歳である。六葉目にビュルゲルの書いた蘭語、七葉目にスチルレルの書いた蘭語の紙片を貼りつけ、スプレーキウォールド一句を書きとどめている。

和蘭の格言を書き記すのは「西賓対晤」以来の慣習のようであるが、訳文を併記していないものが混っているのは寛政十年(一七九八)の「戊午来貢蘭客通弁」以来みられていることで、玄沢が多忙のためかあるいは蘭文に練達していたた

めであったろうか。

古賀侗庵の撰文した「磐水先生遺徳稿」によれば、「十年春初、宿疾寒疝大動、又加傷食、遂以三月晦下世、寿七十一」と記されている。玄沢は寒疝すなわち腸神経痛、いわゆる過敏大腸症が持病であったが、これに急性胃炎が併発して文政十年（一八二七）三月晦に七十一歳で死亡した。

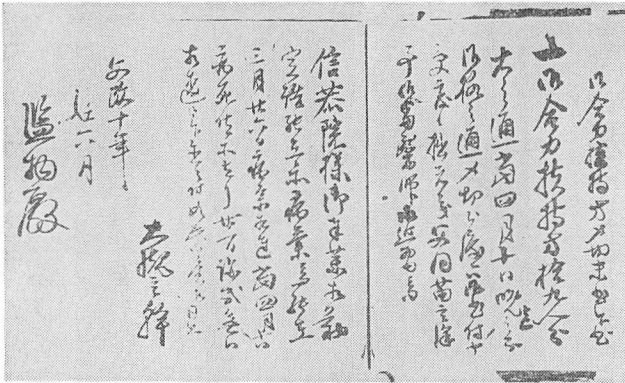


写真 3 大槻玄幹届書控

大槻玄沢が文政十年三月晦に七十一歳で死亡したことは「新撰洋学年表」⁽¹⁾にも記されている。しかるに、「官途要録」のなかの文政十年六月大槻玄幹届書控（写真3）をみると、「信恭院様御奉薬相勳定詰罷在候処病氣ニ而罷在三月二十六日病氣相罹当四月十日病死仕候」と記されており、藩庁には三月二十六日発病、四月十日死亡と届出ている。いずれにしても、玄沢は持病の過敏大腸症から急性胃炎を併発して二週間位の病臥で死亡したようである。

むすび

寛永十九年（一六四二）正月和蘭甲必丹エンサラキ江戸参府、方物を献じて徳川家光に拝謁し、次いで慶安二年（一六四九）和蘭甲必丹の江戸例参に医員カスバル随従したが、医員随員の始めである。蘭人客館は江戸本石町三丁目長崎屋源右エ門宅であったが、万治三年（一六六〇）正月の江戸大火で類焼したため、正月着府を例としていた甲必丹江戸参府を二月中旬参府に期日を改めた。享保九年（一七二四）三月和蘭甲必丹例参の時、幕府医官桂川甫筑（一六六一—一七四七）命ぜられて和蘭人と対話をし、次いで享保十六年（一七三一）三月

和蘭甲必丹例参の時、幕府医官丹羽正伯（一七〇〇—五二）をして物産のことを詢問させた。明和四年（一七六七）の和蘭甲必丹例参の時、中津藩医員前野良沢（一七三三—一八〇三）は小浜藩医員杉田玄白（一七三三—一八一七）を誘って客館に至り大通詞西善三郎に就いて蘭語の疑議を質問した。安永元年（一七七二）二月和蘭甲必丹例参の時、幕府医官桂川甫周（一七五〇—一八〇八、甫筑の曾孫）に命じ、通詞を介して蘭人と対話した。安永五年（一七七六）三月和蘭甲必丹例参の時、幕府医官桂川甫周と小浜藩医員中川淳庵（一七三九—一七八六）は其客館に至り医員ツンベルク（Carl Peter Thunberg 一七四三—一八二二、瑞典植物学者）に医学や植物学の質疑を行った。寛政二年（一七九〇）三月和蘭甲必丹江戶例参の時に、以後五年一参と定められ、寛政六年（一七九四）四月、五年目例参第一回の和蘭甲必丹江戶参府の時、幕府医官桂川甫周の発議によって陪臣の医員である大槻玄沢らが長崎屋源右エ門の蘭人客館に参集して甲必丹ヘムミイ（四十二歳）、書記ラス（二十七歳）、医師ケレル（三十二歳）と対話した。この時の記録が玄沢の「甲寅来貢西客対話」であり、第六回の「甲戌春対話記」までをまとめたのが「西賔対晤」である。

玄沢は文政十年（一八二七）三月晦に持病の過敏大腸症に急性胃炎が加わって死亡したが、「西賔対晤」以後三回の和蘭甲必丹江戶参府に際しては毎回対談した筈である。著者の所蔵する「丙戌春西賔来朝会話雑記」は玄沢の死亡前年である文政九年三月の和蘭甲必丹江戶参府の時の対談記録であり、ことに医員シーボルトの江戸における活動の片鱗を伺い知ることができるところで貴重な文献である。しかも、シーボルトは例参に随行してきた従来の医員よりも学識にすぐれていただけでなく、正しいドイツの臨床医学を伝えたことから名声を博したことが知られる。

「西賔対晤」と「丙戌春西賔来朝会話雑記」を検討してみると、玄沢の西洋の文物に対する知識欲の強いことと西洋の学問に対する理解の深いことが知られ、シーボルトが「オランダ人の友でありヨーロッパの学問の偉大な知己である」とNIPPONのなかで賞讃したことは当然であったと考えられる。

（付記）本論文は第84回日本医史学会総会の講演要旨である。なお、「官途要録」を借覽させて頂いた東北大学名誉教授佐藤昌介氏

に謝意を表する)

引用文献

- (1) 大槻如電 新撰洋学年表 昭2
- (2) 日蘭学会 西貢対晤 昭53
- (3) 山形敬一 佐々木中沢と大槻玄沢 日本医史学雑誌 昭52
- (4) 斉藤信(訳)江戸参府紀行 東洋文庫87 昭53
- (5) 落合泰藏 漢洋病名対照録 明21
- (6) 大槻修二 追遠会誌 明10

(東北大学名誉教授、宮城県対カン協会会長)

Gentaku Otsuki and Seihein-Taigo

by

Shoichi YAMAGATA

The ritual that the Dutch captain at Dejima in Nagasaki visiting Edo to have an audience with the Shogun was initiated in Kansei 19th (1642). When Hochiku Katsuragawa (1661-1747) was ordered to interview the captain in Kyoho 9 (1742), it established the precedent of the medical staff of Bakufu to interview the captain on such occasions. Later, it was decided that the Dutch captain should visit Edo once every 5 years and the first visit, according to this new rule occurred in April of Kansei 6

(1794). It was at this time in the opinion of Hoshu Katsuragawa (1751-1809), a grandson of Hochiku Katsuragawa, a medical staff member of Bakufu, that the opportunity to interview the captain was granted to not only the medical staff of the Shogun but also to the medical staff of other land lords as well. Gentaku Otsuki enjoyed this opportunity and recorded the conversation with the Dutch captain which he had on 6 occasions during the period starting in Kansei 6th (1794) and ending in Bunka 11 (1814). This is collected in a book titled as Seihi-Taigo. Gentaku Otsuki died in Bunsei 11 (1827) and until that year there were an additional three visits by the Dutch captain to Edo. Heijutsu-Haru-Seihin-Raisho-Kaiwa-Zakki, which I have in my library, is the record of such a conversation held in Bunsei 9 (1826). According to this document, the captain at that time was Joan Willem de Sturler, the secretary was Heinrich Buerger and the doctor was Philipp Franz von Siebold. Gentaku recorded the anamnesis and clinical findings of the patients the Dutch doctor treated at that time. He also recorded the prescription given to the patients in Japanese. A diagram of local findings of an acute purulent arthritis done by Siebold himself is also included in the record. It is evident from this record that Siebold had better medical knowledge and better clinical technique than other Dutch doctors who had visited Edo. Siebold wrote in his book "Nippon" that European science. This estimation is well based on when one reads through what Gentaku Otsuki recorded. At that time, Siebold was 31 years old and Otsuki was 70 years old.